

# 「矢作川研究」第16号の発刊にあたって

豊田市矢作川研究所 所長

柴田一美

平成6年7月に豊田市矢作川研究所が発足して17年半が経過します。ここに所報の第16号を発刊することができました。これも偏に、ご協力を頂いた協力研究員の皆様、地元の調査会や愛護会の皆様、そしてご指導、ご配慮をいただきました国、県等の関係機関の皆様のお陰であり、心から感謝申し上げます。

矢作川は長野県の大川入山を源とし、長野、岐阜、愛知の3県を流れて三河湾に注ぐ一級河川です。矢作川には7つのダムが建設されており、川の水利用率は他の河川と比べると非常に高いという特徴があります。また川の長さ比べて水源の位置が高い、つまり勾配のかなりキツイ川であります。そんな流れの中、矢作川が創り出した自然環境にはさまざまな生物が暮らしています。川は我々にとって身近な自然でありますと同時に、多くの生き物たちの住処でもあります。矢作川の流域には多様な自然環境があり、多様な自然環境にはすなわち環境に応じて多様な魚、植物、昆虫等が息しています。研究所はこのような河川の自然環境について市民に対してシンポジウムの開催や所報、月報を通して研究成果、情報を発信してきました。

先日、ある河川研究の活動報告書を見ていたら少し興味を引くページがありました。それは、「水土(SUIDO)文化」という言葉です。この用語は農業土木学会(現農業農村工学会)の学会内に「水土文化部会」を組織したことに基づいており、初めてお聞きになる方が多いと思いますが、勿論近年の用語ではありません。「風土」はよく知られていますが、「水土」は一般化しているとはいえません。意味としては「風土」は人間が形成した基層的な文化であり、これに対して「水土」は水と土ということで自然環境という意味です。ですから「水土文化」といえば、昔から常に水と土と関わりながら生きてきた人間の文化ということが出来ます。風土がその土地土地で異なるように、水土もそれぞれの地域に育まれてきた独特のものがあります。

所報「矢作川研究」も今年で16号になりました。どちらかといいますと今までは川の中のいきもの、水辺の昆虫類や植生に関する調査・研究報告を多く発表してきました。これからは川に関する調査・研究は勿論であります、長い歴史の中から生まれた、矢作川独自の水土文化という切り口で矢作川流域の文化に少しスポットを当てていきたいと思えます。「日本人にとって、大地イコール川である、という言葉をよく耳にしますように一昔前まで、われわれにとって川はもっともっと身近なものであり、人生と深く係ってきました。そして川の姿の移り変わりは、その流域住民の生活の移り変わりを良しにつけ悪しにつけ映し出してきました。

研究所では今後流域の文化を始め、色々な切り口で矢作川を評価していきたいと思えます。この所報によって矢作川に対する新たな側面が読者に僅かでも発見されれば幸いです。今回はその第一弾として「用水と開削者祭祀・枝下用水と西澤真蔵」を紹介させていただきます。

今後とも引き続き多くの皆様の限りないご支援とご協力をお願いいたします。